二宮尊徳にみる桜町領における住宅および社会基盤の整備

— 農書にみる建築思潮に関する史的研究 その2 —

DEVELOPMENT AND MAINTENANCE OF HOUSE AND INFRASTRUCTURE
BY NINOMIYA SONTOKU IN SAKURAMACHI

Historical study on architectural idea in the texts on agriculture Part 2

波多野 想*, 篠野 志郎**, 初田 亨***

So HATANO, Shiro SASANO and Tohru HATSUDA

The aim of this paper is to clarify architectural idea of Ninomiya Sontoku through development and maintenance of house and infrastructure in sakuramachi. Sontoku had included maintenance of infrastructure in the conditions that attain farm village revival. The similarity with the *Mohan-mura* at the Meiji era can be grasped here. That is, that the thought, which is already going to change a village synthetically in the end of a Edo era, was doing by Sontoku is the fact which is worthy of remark. When Sontoku maintained infrastructure in a farm village, the chief aim was in reinforcement of agricultural production. Although the architectural idea of Sontoku is not original by the residence itself, while control of building simply is added in case of construction of a residence, the way of thinking which is going to change a life of village people by offering a residence for various reasons has peculiarity.

Keywords: *NINOMIYA Sontoku, Village Revival, Infrastructure, Architectural Idea*

二宮尊徳, 農村復興, 社会基盤, 建築観

1. はじめに

明治後期、日本政府は強国のひとつとして世界に進出していくために、町村財政の強化、農事改良、民衆強化を軸とした地方改良運動を通して、地方町村を国家のための共同体に再編成することを目指した¹。地方改良運動は、明治41（1908）年に発せられた戊申詔書に基づいて全国的に展開されていくもので、日清・日露戦争を経る中で疲弊していった地方自治体の強化・立て直しを図ろうとしたものであった。こうした運動が政府の主導で行われたことは、日本社会の基底が「地方」すなわち村落共同体にあったことを端的に示している²。

日本の共同体の大部分を占める農村部において、建築思潮がどのように編成されていったかを明らかにすることが本研究の上位目標であり、前稿では、地方改良運動の一環として策定された模範村を取り上げ、その理念および農村にみられる建築思潮の一端を検討した³。ここでは、模範村の中で最も顕著な建築的性格を示す役場建築をみることで、近世の住居形式が格式を転換する形で近代以降に継承されている可能性があることを指摘した。

一方、地方改良運動を推進する上で、大きな役割を果たしたのは、幕末・明治期に二宮尊徳の門弟によって組織された報徳社および明治39（1906）年に組織された報徳会（大正元年に中央報徳会に発展）である⁴。報徳会は、明治38（1905）年に行われた二宮尊徳没後50年

祭を契機に⁵、農商務大臣・平田東助、内務省地方局府県課長・井上友一、同事務局嘱託・留岡幸助などの主導のもとに半官半民の内務省外郭団体として発足した組織である。報徳会の結成の主旨は、二宮尊徳の報徳主義によって地方民の道徳的強化を図ろうとするもので⁶、会告には「誠実勤労の民風、協同推譲の精神を作興し、道徳、経済、自治、教育の各方面に亘りて、互に其連絡一致を計り、之が改良発展を期す」と掲げ、各種の事業を通して町村住民の教化善導に努めた⁷。

以上のことは、近代化を推進する過程で、近世的論理が援用されていたことを意味している。すなわち、地方改良運動の推進や模範村の策定において中心的役割を担っていた思想が二宮尊徳に由来する報徳思想であるとするならば、江戸時代後期以降における二宮尊徳の建築観⁸、村落観を適及的に考察する必要がある⁹。

二宮尊徳（天明7年7月23日～安政3年10月27日）は、荒廃した関東およびその周辺を中心に、農村の復興に尽力し、その過程で報徳思想を形成するとともに、それに基づいて生産倫理に裏付けられた村落共同体を作り上げるための具体的方策を考案、実践した。二宮尊徳による復興仕法の内容は多岐にわたっているが、荒地起返しや入百姓の定着などとともに、社寺や住宅の建設、用水路の整備、道路および橋梁の普請などの社会基盤の整備も行っていた¹⁰。この事実は、幕末から明治期にかけての農村部における近代化の過程を考察するうえ

* 東京工業大学大学院人間環境システム専攻
大学院生・修士(工学)

** 東京工業大学大学院人間環境システム専攻 教授・工博

*** 工学院大学工学部建築学科 教授・工博

Graduate Student, Dept. of Built Environment, Tokyo Institute of Technology, M. Eng.

Prof., Dept. of Built Environment, Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kogakuin University, Dr. Eng.

で重要視するべきものである。しかしこれまで、尊徳による社会基盤の整備について建築史的に論考した研究は、日光神領内の轟村における報徳仕法による住宅建設の実態を検討した吉田純一によるものがあるのみで、尊徳の業績の全体像の把握には至っていない¹¹。そこで本稿では、初期の仕法地であり、尊徳の思想形成の上で最も重要であったとされる¹²、下野国芳賀郡桜町領（現在の栃木県芳賀郡二宮町物井、横田および真岡市東沼）の仕法を中心に二宮尊徳の建築観、村落観を検討する¹³。具体的には、桜町領において仕法の一環として行われた住宅の屋根替え、新築、仮小屋の建設、および道路、橋梁、用悪水路の整備を通して、尊徳の建築、社会基盤に対する思想を明らかにする。

なお、二宮尊徳の著作は、『二宮尊徳全集』全36巻に収録されている¹⁴。同全集は、報徳仕法の指導原理について記述した「原理」、原理を生活様式化し実施の規範とした「仕法雛形」、尊徳の生涯の日録である「日記」、往來の信書を収録した「書翰」、実際の事業に関して収録した「仕法書」などからなっており、報徳仕法の具体的内容や報徳の精神をうかがうことができる。

2. 「原理」にみる二宮尊徳の建築理念

尊徳の思想すなわち指導原理は、「三才報徳金毛録」を中心に「報徳訓」「為政鑑」「百種輪廻鏡」などにまとめられている。これらはすべて、桜町領の仕法が一応の成果を収めていた天保5（1834）年に記されたものである。それらで示されている思想は、現実から学んだ知恵を、形而上学的に高めたものである。すなわち、経験を抽象化し、独自の思想大系として一般に示した¹⁵。その代表である「三才報徳金毛録」で説かれているのは、報徳の基本となる「一円融合」の思想である。これは、宇宙の万物から人事に至るまでのすべてをひとつの円内に融合するものとして説く思想である。尊徳は、「一今日金兵衛を以て申遺候儀、元丸之内に丸有つて丸の内に一つ物あり、一つの内に両輪あり、又其内に一つ含む、是れ天地人之三才具足して、五常行と成る万代不朽之道に御座候」と述べる¹⁶。すなわち尊徳は、たとえば男女など、万物のうちで対立関係にあるものを一元的に把握するとともに、両者の相関を論じる。そして、相関するものが融合するときには、相互が発展し生成するとの思想を尊徳はもっていた。

このような思想をもつ尊徳は、次のように人間社会の成立を説明する。

それ本は一円無田なり。無田変じて一田を発す。一田あれば十田を発す。十田あれば百田を発す。百田あれば千田を発す。万田の本を想へば無田に歸す。田なければすなはち生養なし。田あるによつて生命を育つ。田徳あるが故に君は君たり。田徳あるが故に妻妾は妻妾たり。田徳あるが故に子孫は子孫たり。田徳あるが故に眷属は眷属たり。田徳あるが故に衆民は衆民たり。田徳あるが故に財宝は財宝たり。田徳あるが故に交友は交友たり。田徳あるが故に諸芸は諸芸たり。田徳あるが故に車馬は車馬たり。田徳あるが故に万器は万器たり。もし田圃なければ、人倫をしてつひに人倫たらざるしむるを得んか。この故に倭朝の天照大神、漢土の堯・舜は、自ら耒耜を作り籍田を耕して、農の先務となし、以つて賢を求む。後世誰かその徳を忘るべからざらん。¹⁷

すなわち尊徳は、田畑からの生産物＝「田徳」が人間社会の基盤になっており、その上に人間関係や文化などが成立していると考えてい

る。換言すると、自然を開拓し、生産を推進するところに人間社会が成立し、自然と人間との対抗関係から生じる「田徳」がすべての制度や文化の根本になっていることを説いている¹⁸。そして、建築や村落も「田徳」との関係で説明される。

それ本は一円田徳なり。（中略）田徳なければ宮殿なし。田徳なければ城郭なし。田徳なければ祖廟なし。田徳なければ寺社なし。田徳なければ室家なし。田徳なければ亭園なし。田徳なければ橋径なし。（中略）田徳あるがゆえに衣食住あり。衣食住なければ人界にあらず。衣食住あるが故に人界たり。人界に処する者は田圃より貴きはなし。（後略）¹⁹

すなわち、ここでも田畑の生産物があることによって、建築や橋梁、道路といった社会基盤の存在していることが説かれている。

さらに「田徳」を人間社会の基盤とみる尊徳は、次のように「天道」＝自然と「人道」＝作為を区別して考える。

翁曰、天理と人道との差別を、能弁別する人少し、夫人身あれば欲あるは則天理なり、田畑へ草の生ずるに同じ、堤は崩れ堀は埋り橋は朽る、是則天理なり、然れば、人道は私欲を制するを道とし、田畑の草をさるを道とし、堤は築立、堀はさらひ、橋は掛替るを以て道とす、此の如く、天理と人道とは格別の物なるが故に、天理は万古変せず、人道は一日愈れば忽ちに廃す、されば人道を勤むるを以て尊しとし、自然に任ずるを尊はず、（後略）²⁰
ここでは明らかに「人道」＝作為の意義を認めている。さらに、翁常に曰、人界に居て家根のものを坐視し、道路の破損を傍観し、橋の朽たるをも憂ざる者は則人道の罪人なり²¹

といい、建築や社会基盤が整備されないことを悪と捉えている。

以上のように、「原理」をみると、「田徳」を根本にもつ「人道」として社会基盤の整備を重要視していることが判る。そこで次章以下では、社会基盤の整備を、尊徳自身が仕法においてどのように展開したかについて具体的にみていくこととする。

3. 報徳仕法における社会基盤の整備

北関東農村は、土地生産力が低く再生産基盤が脆弱であった。その上、在地の小農民は過重な貢租収奪にさらされ、さらに近世中期以降には商品経済の発展によって、没落を余儀なくされ、農村の人口は減少した。その結果、手余り荒地が多く発生し、荒廃現象が起こった。またその荒廃によって、貢租収納量は大幅に減少し、領主側の財政も深刻の状況に陥った²²。

そうした荒廃現象に対して幕府は、出稼奉公の制限、荒地起返しの奨励、年貢の減免などの措置をとり、さらに寛政の改革では、旧里帰農令、夫食・種籾の貸付、小児養育料の貸与などの対策を講じた。特に北関東農村では、寛政9（1797）年に下野真岡陣屋に赴任した竹垣三右衛門や同11年に下野東郷陣屋に赴任した岸本武太夫などの代官によって、小児養育仕法、出稼奉公人の貸与や年貢免除の特典を与えて帰農を促す荒地起返し、家作・農具・扶持代などを負担して入植を図る入百姓政策などの施策がとられた²³。また中小の私領でも同様な荒地対策がとられた²⁴。

こうした状況のなか、尊徳は、文政4（1821）年に小田原藩主大久保忠真より分家の宇津家の知行所である桜町領の復興を命じられた。

尊徳が仕法を開始した当時の桜町領は、尊徳が仕法のために廻村してみると「仰、昨年（文政3年：筆者註）罷越見及び候處、用水之便

表1 触書一覧

1	御公儀様御法度之儀は不及申上、御家之御家法不相背蔽重可奉守事、
2	博奕、賭之諸勝負、別紙申上置候通、急度相債可申候事、
3	喧嘩、口論急度可相嗜事、
4	御田地、用水、堰、橋、道普請、夫人足等之儀被 仰出次第刻限無遅滞罷出相勤可申事、
5	元日為年始、村役人初一同急度相勤可申事、
6	年始、盆、彼岸、旦那等無怠、仏参可致事、
7	耕作農業之儀は、年始相済候上、不限晴雨怠らず、専一に相勤可申事、
8	村役人之外、壹一切相用申間敷事、
9	衣類之儀は、絹布は勿論、糸り並帯等にも相用申間舖候、縦木綿たりとも、三百文限、高値之染無用、可仕候事、
10	脇差並羽織、木綿合羽、相用申間敷事、
11	櫛、筥、笠、きせる、たば粉入、足袋、下駄之類、銀細工は不及申上、高値之品無用可仕候事、
12	傘、日傘、雪踏、うら附草履、無用可仕候事、
13	婚姻其外、吉凶之節は、村役人へ申達、差図之上取計可仕候事、
14	諸道具之儀は、相成丈手細工を用、費之入用不相懸様心懸可申事、
15	夫喰、飯米之儀は、相成丈俵約を以、麦、粟、稗、龜飯相用、飲食奢、朝夕に心懸急度相債可申事、
16	他出之儀限致間敷候、無施節は行先村役人へ相達可申事、

表註『二宮尊徳全集 第十巻』二宮尊徳偉業宣揚会、昭和3年、p.1096より作成

利、田畑之つり合は申分も無之相見へ候共得連年人少次第に衰微、艱難之様子、人氣之模様、當時之姿にては如何様御世話被進候とも、中々事を遂候期も不相見、不容易段重役中へも申達」する状況であった²⁵。しかも具体的には、「都合高四千百九石壺斗式升八合、反別五百壺町八畝式拾歩、家數四百三十三軒有之候處、土地柄故連々人少致困窮、田畑手入不行届、匱作に罷成、取穀相減じ、暮方は勿論、辨納物に差支、或は逃潰、又は死潰、家數、人別、御収納等夥數相減じ、古へ之三分一も無御座、荒地と罷成、當時漸家數百五拾六軒、夫連も危迫之者而已、今日を凌兼、既に退轉亡所同様罷成」と尊徳自身が記述しているように、非常に荒廃した状況にあった²⁶。そこで尊徳は、以前の農村に復旧するために次の事が必要であると考えた。

仰付、余米之分荒地起返し難村舊復之仕法入用金として、年々御渡可被下候、然る上は一切御出方に相拘不申、土中に埋れ居候無盡之米、麥、雜穀、取増、其潤澤を以、用惡水、道、橋、普請、神社堂寺、並家小屋再興、入百姓人別増、借財返済、窮民撫育、潰百姓取立、川欠山崩、前々古荒、深耕等に至る迄起返し、取立遺候はゞ、御知行所而已に無御座、前後左右何方までも急度難村舊復仕²⁷

すなわち、農業生産力の増強などとともに、社寺および住宅の建設、道路や橋梁の普請などの社会基盤の整備が農村を復興する上で重要であると尊徳は考えた。そしてそれに対する尊徳の方針は、まず彼の出した触書にみることができる。

表1は、尊徳が仕法に着手した当時に出した触書の内容を一覧したものである。ここからはまず、村民の移動を禁止し、村内への緊縛を行うとともに、博奕や喧嘩の禁止といった卑近な生活統制、冠婚葬祭の届け出、仏参りなどを通して、村民の生活全般にわたって把握しようとする思考が看取できる。また衣類や持ち物、食生活の制限など、衣食住全般にわたる強い統制がうかがえる。そのなかには、4項目および8項目のように、社会基盤の整備に関わる項目もみられる。4項目は、用水路の整備、橋梁、道路の普請などに際しての人足の確保を法的に規定したものである。また8項目は、住宅に対する質的な統制である。

さらに文政6(1823)年12月には「凡知行所大小百姓共親に孝行は申迄もなく他人に信を失はず、其業とする耕作に無怠、職にあらざる藝能はこのむべけらず、屋作衣服食物等分限に過べからず(後略)」とする触書を出している²⁸。

これらふたつの触書からは、尊徳が社会基盤の整備を重要視してい

たことと、建設される住宅の質を統制していたことが判る。

しかし尊徳は、以上のような触書を通して農民に対する統制を行う一方で、優良な農民の表彰や助成を行った。仕法資金は「神社佛堂の修理、極難貧者の救済善行者、精業者の表旌、生業困難者に對する無利息金の貸付、産業の奨励生活及職業に對する改善發達の施設、道路、橋梁、上水、下水、衛生、教化其他公共の福利増進施設等に活用せられる」²⁹。それは村落

の良風美俗としての農業出精や一家の和合などに対して行われるものであるが、その理由のひとつは、教化の効果を顕著にするためであった³⁰。ここで重要なのは、その褒美として米、金銭、農具などが与えられる場合とともに、住宅を建設して提供したり、住宅の建設に対して助成金を与えたりする場合も多かったことである。そうした事実は、文政5(1822)年から天保14(1843)年までの22年間に行われた善行、篤行、精業に対する表彰の公文書のうちで代表的なものを書き抜きした「宇津鉦之助殿御知行所村々 荒地起返村柄取直仕法御褒美被下申渡書拔帳上」に数多く散見される³¹。同史料にある表彰文のうち、住宅に関わる褒美を一覧したものが表2である。表2をみると、住宅に関わる褒美が個人に対しては28件、30名、桜町領内の村落に対して1件の全29件ある。それらの内容を分類すると、「家作料金」の助成4件、新築家屋(主屋)の提供15件、小屋掛け費3件、古家提供1件、屋根替え3件、建て替え3件となり、住宅に関わる褒美としては新築家屋の提供が圧倒的に多いことが判る。その具体的な理由をみてみると、多くは次の3点に集約される。まず、文政8(1825)年3月20日には入百姓の寸平に対して、

其方儀去々末年當知行所へ罷越、田畑多分致開發、耕手入等も一際行届、右作徳を以冥加米差上、未住居も不定、其上人別にも不加身分にて、奇特之至、仍て爲家作料金五兩被成下、且御酒被下置候。³²

と、荒地の開発などを理由に住宅の建設代として5両を助成している。

また同日、物井村の彌七に対しては、

其方儀今般荒地起返、入百姓人別増、窮民撫育、借財返済、難村舊復之仕法被仰出候、御趣意を奉感服、老母引受、分家相續致度段相心掛、追々農業致度精候段、奇特に付、爲御褒美横貳間半、長七間半家作御普請被成下、新家御取立被下置候間、彌御百姓致出精可申候。³³

と、「分家相續」、農業出精などを理由に規模の定まった住宅そのものを提供している。住宅を提供するに際して規模を確定している場合がある点は尊徳の建築理念を考えるうえで重要である。

さらに、自然災害によって家屋が大破したことを理由に、古家や新築家屋が提供される事実もみられる。

このように尊徳は、触書によって村民を厳しい統制下におくとともに、教化の一環として村民に褒美を与えることによって農村の復興を達成しようとした。そしてそのなかで社会基盤の整備にも力を入れよ

表2 住宅に関する表彰

	村民名	申渡日	申渡
1	市左衛門・佐兵衛	文政5	11月15日
2	丈八	文政5	12月14日
3	清左衛門	文政5	12月15日
4	東沼村 横田村 井井村	文政5	12月21日
5	寸平	文政8	3月20日
6	彌七	文政8	7月18日
7	甚太郎	天保6	11月7日
8	伴治 (彌兵衛次男)	天保6	12月24日
9	豊太郎・角次	天保7	7月28日
10	清右衛門後家	天保7	7月28日
11	十蔵	天保7	7月28日
12	政吉	天保7	7月28日
13	熊吉 (百姓友之丞弟)	天保7	8月22日
14	庄藏	天保8	12月7日
15	淺右衛門	天保8	12月7日
16	忠治 (名主)	天保8	12月10日
17	兵吉	天保8	12月10日
18	源左衛門 (組頭)	天保10	10月22日
19	芥右衛門	天保11	12月31日
20	萬兵衛	天保11	12月3日
21	保太郎	天保11	12月3日
22	竹次郎	天保11	12月8日
23	喜左衛門 (組頭)	天保12	10月15日
24	定吉	天保12	10月15日
25	豊太郎	天保12	10月15日
26	重吉	天保12	10月15日
27	常藏	天保12	10月15日
28	森藏	天保12	10月15日
29	辰藏	天保12	10月15日

うとしていた。特に尊徳は、村民の日常生活にとって必要不可欠な住宅の整備を重視していた。

4. 二宮尊徳による住宅建設の具体的内容

これまでみてきたように住宅の建設を重視する尊徳は、それらに関する直接的な記録も残している。桜町領に関しては「新百姓御取立家作被下名前書拔帳」や「神社堂寺並新百姓御取立家作被下名前書拔帳」といった住宅の建設年と居住者の名を連ねたもの、「新家作並古家立替大工賃銭扶持米取調帳」や「本家灰小屋家根替仕様帳」といった住宅や灰小屋などの規模を明記したもの、「御知行所村々新家作並古屋建替御普請被下取調帳」や「新百姓並分家御取立家作灰小屋等被下方被仰渡留」といった新築を許可した際の申渡を列記したものなどがある³⁴。さらに仕法中の日記には、住宅の新築や修復、屋根の葺き替えの様子がことあるごとに記されている³⁵。これらを総括的に扱うことによって、報徳仕法のものでの建築行為の実態を定量的かつ定性的に把握できると考える。

表3は、文政5（1822）年から嘉永7（1854）年にかけて桜町領において行われた住宅の屋根替え、新築、建て替え、仮小屋の建設（小屋掛け）、古家の提供の内容を規模や理由に関して列記したものである。表3を俯瞰すると、全体234件のうち、182件に対して新築、36件に対して屋根替え、11件に対して建て替え、5件に対して仮小屋の建設、2件に対して古家の提供が行われており、新築件数が圧倒的に多い³⁶。仕法を開始した当初の家数が156軒であったという前掲の尊徳自身の文言と比較してみると、尊徳がいかに住宅の建設を推進していたかが判る。また先述したように表彰にあたって最も多かったのが新築家屋の提供であったことと併せると、182件ある新築のうち最も多くを占めているのは、尊徳の側から提供された住宅であることが推察される（写真1）³⁷。

その新築する理由としては、「新百姓御取立家作被下名前書拔帳」に

右者今般荒地起返し、村柄取直し趣法取纏ひ、去る文政五午年以來神社、堂寺、御陣屋、並郷藏、次男、三男、或は潰退轉式取立、又者入百姓其他出精人新家作被下置、木小屋灰小屋等之儀は、大體本家

写真1 報徳仕法によって建設された住宅 (旧横田圓蔵邸)
（栃木県教育委員会文化課事務局編集『栃木県の民家』栃木県教育委員会、昭和57年、p.136より転載）

表3 桜町領における住宅の建設

1	村民名	村名	建設年	普通	類型	規模	坪数	相続	理由
1	太八(西原村)	東原村	文政5 1822	●					
2	喜六	東原村	文政6 1823	●					
3	喜次(物)	東原村	文政6 1823	○					
4	作左衛門	東原村	文政9 1826	●					「田畑高反別相繼之家作」
5	作左衛門	東原村	文政11 1828	●					
6	佐七	東原村	文政11 1828	▲		6間5尺×2間5尺			
7	西蔵	東原村	文政11 1828	▲					
8	神保氏衛	東原村	文政11 1828	●					百穂伊右衛門
9	徳五郎	東原村	文政12 1829	●					
10	徳五郎	東原村	文政12 1829	●					
11	徳五郎	東原村	文政12 1829	●					
12	武右衛門	東原村	文政12 1829	●					
13	安蔵	東原村	文政12 1829	●					
14	國蔵	東原村	文政12 1829	●					
15	茂吉	東原村	文政12 1829	●					
16	茂吉	東原村	文政12 1829	●					
17	藤左衛門	東原村	文政12 1829	●					
18	徳助	東原村	文政12 1829	●					
19	平左衛門	東原村	文政12 1829	●					
20	興隆氏衛	東原村	文政13 1830	●					
21	興隆氏衛	東原村	文政13 1830	●					
22	市左衛門	東原村	天保3 1832	●					
23	新左衛門	東原村	天保3 1832	●					
24	豊蔵	東原村	天保4 1833	●					
25	茂蔵	東原村	天保4 1834	●					
26	熊吉	東原村	天保6 1835	●					
27	徳左衛門	東原村	天保6 1835	●					
28	伴治	東原村	天保6 1835	●					
29	庄左衛門	東原村	天保6 1835	●					
30	民蔵	東原村	天保6 1835	●					
31	熊吉	東原村	天保7 1836	●					
32	辰蔵	東原村	天保7 1836	●					
33	仙蔵	東原村	天保7 1836	●					
34	忠蔵	東原村	天保7 1836	●					
35	吉右衛門	東原村	天保7 1836	●					
36	角次	東原村	天保7 1836	●					
37	清右衛門茂家	東原村	天保7 1836	□					
38	吉右衛門	東原村	天保8 1837	●					
39	氏吉	東原村	天保8 1837	●					
40	佐左衛門	東原村	天保10 1839	●					
41	作左衛門	東原村	天保10 1839	●					
42	保太郎	東原村	天保11 1840	●					
43	久兵衛	東原村	天保13 1842	●					
44	茂蔵	東原村	天保13 1842	▲					
45	徳治	東原村	天保13 1842	▲					
46	徳治	東原村	天保13 1842	▲					
47	徳五郎	東原村	天保13 1842	▲					
48	忠蔵	東原村	天保13 1842	▲					
49	助兵衛	東原村	天保14 1843	●					
50	三之助	東原村	天保14 1843	●					
51	平左衛門	東原村	天保14 1843	●					
52	孝七	東原村	天保14 1843	●					
53	氏吉	東原村	天保14 1843	●					
54	前左衛門	東原村	天保15 1844	●					
55	佐左衛門	東原村	弘化元 1844	●					
56	豊右衛門	東原村	弘化元 1844	●					
57	豊蔵	東原村	弘化元 1844	●					
58	平左衛門	東原村	弘化5 1848	●					
59	氏吉	東原村	弘化5 1848	●					
60	平左衛門	東原村	嘉永元 1848	●					
61	仙右衛門	東原村	嘉永2 1849	●					
62	仙右衛門	東原村	嘉永2 1849	●					
63	仙右衛門	東原村	嘉永2 1849	●					
64	氏吉	東原村	嘉永元 1849	●					
65	氏吉	東原村	嘉永2 1849	●					
66	徳五郎	東原村	嘉永3 1850	●					
67	徳五郎	東原村	嘉永3 1850	●					
68	徳助	東原村	嘉永3 1850	●					
69	富次(治)	東原村	嘉永4 1851	○					
70	徳蔵	東原村	嘉永6 1853	●					
71	清七	東原村	天保7 1836	●					
72	助右衛門	東原村	?	?					
73	文次	東原村	?	?					
74	五郎次	東原村	?	?					
75	金右衛門	東原村	?	?					
76	徳太郎	東原村	?	?					
77	忠左衛門	東原村	?	?					
78	文次	東原村	?	?					
79	伊八次男	東原村	?	?					
80	富次	東原村	?	?					
81	金蔵	東原村	?	?					
82	徳兵衛	東原村	?	?					
83	市左衛門弟	東原村	?	?					
84	市左衛門弟	東原村	?	?					
85	市左衛門弟	東原村	?	?					
86	市左衛門弟	東原村	?	?					
87	市左衛門弟	東原村	?	?					
88	市左衛門弟	東原村	?	?					
89	市左衛門弟	東原村	?	?					
90	市左衛門弟	東原村	?	?					
91	市左衛門弟	東原村	?	?					
92	市左衛門弟	東原村	?	?					
93	市左衛門弟	東原村	?	?					
94	市左衛門弟	東原村	?	?					
95	市左衛門弟	東原村	?	?					
96	市左衛門弟	東原村	?	?					
97	市左衛門弟	東原村	?	?					
98	市左衛門弟	東原村	?	?					
99	市左衛門弟	東原村	?	?					
100	市左衛門弟	東原村	?	?					
101	市左衛門弟	東原村	?	?					
102	市左衛門弟	東原村	?	?					
103	市左衛門弟	東原村	?	?					
104	市左衛門弟	東原村	?	?					
105	市左衛門弟	東原村	?	?					
106	市左衛門弟	東原村	?	?					
107	市左衛門弟	東原村	?	?					
108	市左衛門弟	東原村	?	?					
109	市左衛門弟	東原村	?	?					
110	市左衛門弟	東原村	?	?					
111	市左衛門弟	東原村	?	?					
112	市左衛門弟	東原村	?	?					
113	市左衛門弟	東原村	?	?					
114	市左衛門弟	東原村	?	?					
115	市左衛門弟	東原村	?	?					
116	市左衛門弟	東原村	?	?					
117	市左衛門弟	東原村	?	?					
118	市左衛門弟	東原村	?	?					
119	市左衛門弟	東原村	?	?					
120	市左衛門弟	東原村	?	?					
121	市左衛門弟	東原村	?	?					
122	市左衛門弟	東原村	?	?					
123	市左衛門弟	東原村	?	?					
124	市左衛門弟	東原村	?	?					
125	市左衛門弟	東原村	?	?					
126	市左衛門弟	東原村	?	?					
127	市左衛門弟	東原村	?	?					
128	市左衛門弟	東原村	?	?					
129	市左衛門弟	東原村	?	?					
130	市左衛門弟	東原村	?	?					
131	市左衛門弟	東原村	?	?					
132	市左衛門弟	東原村	?	?					
133	市左衛門弟	東原村	?	?					
134	市左衛門弟	東原村	?	?					
135	市左衛門弟	東原村	?	?					
136	市左衛門弟	東原村	?	?					
137	市左衛門弟	東原村	?	?					
138	市左衛門弟	東原村	?	?					
139	市左衛門弟	東原村	?	?					
140	市左衛門弟	東原村	?	?					
141	市左衛門弟	東原村	?	?					
142	市左衛門弟	東原村	?	?					
143	市左衛門弟	東原村	?	?					
144	市左衛門弟	東原村	?	?					
145	市左衛門弟	東原村	?	?					
146	市左衛門弟	東原村	?	?					
147	市左衛門弟	東原村	?	?					
148	市左衛門弟	東原村	?	?					
149	市左衛門弟	東原村	?	?					
150	市左衛門弟	東原村	?	?					
151	市左衛門弟	東原村	?	?					
152	市左衛門弟	東原村	?	?					
153	市左衛門弟	東原村	?	?					
154	市左衛門弟	東原村	?	?					
155	市左衛門弟	東原村	?	?					
156	市左衛門弟	東原村	?	?					
157	市左衛門弟	東原村	?	?					
158	市左衛門弟	東原村	?	?					
159	市左衛門弟	東原村	?	?					
160	市左衛門弟	東原村	?	?					
161	市左衛門弟	東原村	?	?					
162	市左衛門弟	東原村	?	?					
163	市左衛門弟	東原村	?	?					
164	市左衛門弟	東原村	?	?					
165	市左衛門弟	東原村	?	?					
166	市左衛門弟	東原村	?	?					
167	市左衛門弟	東原村	?	?					
168	市左衛門弟	東原村	?	?					
169	市左衛門弟	東原村	?	?					
170	市左衛門弟	東原村	?	?					
171	市左衛門弟	東原村	?	?					
172	市左衛門弟	東原村	?	?					
173	市左衛門弟	東原村	?	?					
174	市左衛門弟	東原村	?	?					
175	市左衛門弟	東原村	?	?					
176	市左衛門弟	東原村	?	?					
177	市左衛門弟	東原村	?	?					
178	市左衛門弟	東原村	?	?					
179	市左衛門弟	東原村	?	?					
180	市左衛門弟	東原村	?	?					
181	市左衛門弟	東原村	?	?					
182	市左衛門弟	東原村	?	?					
183	市左衛門弟	東原村	?	?					
184	市左衛門弟	東原村	?	?					
185	市左衛門弟	東原村	?	?					
186	市左衛門弟	東原村	?	?					
187	市左衛門弟	東原村	?	?					
188	市左衛門弟	東原村	?	?					
189	市左衛門弟	東原村	?	?					
190	市左衛門弟	東原村	?	?					
191	市左衛門弟	東原村	?	?					
192	市左衛門弟	東原村	?	?					
193	市左衛門弟	東原村	?	?					
194	市左								

表4 物井村における道路普請

内容	施工年月		起点	終点	長さ(間)	幅	高さ	総人員
道路普請 「道普請人足取調帳」	天保12年	2月～3月	杉山御林下	八本關用水堀	75	2間2尺	上置腹附	223人5分
			八本關用水堀	内野境曲角	84	東2間半、西3間	2尺5寸～3尺余り	人足 186人
			内野境曲角	高田道追分	250	3間	2尺余り	破畑 10人5分
			高田道追分	横堀村出口橋際	120	3間	2尺～3尺余り	村役人 27人
			総計		529			

表5 物井村および横田村における用水路普請

内容	施工年月		堰名称	人足数
用水路普請 物井村 「用水路堰堀人足取調帳」	天保13年	11月23日	字蓮池堰	人足 50人 世話人 7人
		11月26日	和田大口堰 谷地か長とろ堰	人足 51人 世話人 6人
		11月27日	大口用水堰被堀所々 塚本西谷地加道土持 六反田堰	人足 50人 世話人 7人
		11月28日	(不明)	人足 7人
横田村 「用水路堰堀人足取調帳」	天保13年	11月晦日	字七反田堀堰 同中堀堰	人足 22人 世話人 4人
		12月朔日	字中堀堰 小沼尻堰 其外に小堀所々	人足 23人 世話人 4人
		12月2日	字小嶋堰 字中堀堰	人足 24人 世話人 4人

表6 物井村および横田村内の整備における人足数

内容	施工期間		人足数
「物井村向原大谷桑木原島打 甲賀山耕地起返用悪水道橋普 請人足取調帳」	弘化4年 嘉永元年	8月5日 3月28日	817人
「横田村字葭添耕地荒地起返 用悪水道橋普請人足取調帳」	嘉永元年	2月15日 11月14日	284人
「横田村鍋沼耕地荒地起返堀 捲並道橋普請人足帳」	嘉永元年	10月14日 11月5日	368人5分
「下物井村登字免幾耕地地 下ヶ並用悪水普請人足帳」	嘉永元年	10月10日 10月13日	148人5分
「西物井村之内谷近並下谷田 東中谷田竹下用悪水新規堀立 人足取調帳」	嘉永3年	8月26日 9月5日	424人
総計			2042人

作に準じ、御普請被成下置、尤大小不同者有之候得共、先本家類
名前荒増書抜取調申候處、如是御座候以上³⁸⁾

とあり、農業出精、荒地開発に対する褒美、分家に際して奮起を促す
ためなどが考えられる。さらに「家居相亂住居不相応成」というもの
や困窮によって朽ち果てたためというものなどもある。理由として最
も多いのは、新築182件のうち82件において明らかにみられる新百
姓としての取り立てである。すなわち尊徳は、村民の増加が農村復興
にとって必要なことであると考え、いかに新百姓の導入に力を入れて
いたかが判る。このように新築の理由は様々であるが、尊徳が住宅の建
設を農村の復興にとっていかに必要なことと考えていたかが判る³⁹⁾。

次に、建設した住宅の具体的な内容をみていく。

規模が詳細に判る住宅は、新築件数182件のなかで、主屋が22棟、
灰小屋が18棟、木小屋が5棟ある。主屋の建設とともに、灰小屋の
建設に力を入れていたことが判る。灰小屋の建設に重点をおいていた
理由について、尊徳はまったく言及していないが、灰小屋の多くが規
模を設定した状態で建設されていることも含めて考えると、これは農
業を行う上で必要な人糞の確保を重視していたことのあらわれであ
り、そうした理念の建築としての具現化であると推測される。

また家屋構成は、主屋・灰小屋（もしくは雪隠）・木小屋の3棟構
成か主屋・灰小屋の2棟構成が多くを占めている。

主屋の規模をみると、坪数は17坪半から45坪までであり、その格
差は決して小さくないが、全体としては30坪前後の住宅が多いこと
が判る。

住居絵図帳などから江戸時代の日光街道・日光御成街道沿いの19
の農村における民家について検討した津田良樹は、家屋構成について
主屋・雪隠の2棟、主屋・雪隠・木小屋の3棟構成が大多数を占めて
いること、一般百姓の住宅の規模が正徳期から天保期にかけて20坪
程度から30坪程度に漸増する傾向があることなどを明らかにしてい
る⁴⁰⁾。津田の明らかにしている諸点と尊徳によって建設された住宅の
内容を比較すると、尊徳による住宅が当時の一般的な民家と規模、家
屋構成などの点で大差がないことが判る。すなわち、尊徳の建設する
住宅は、特に周辺の状況と相違するものではなく、逆に一般性を有す
るものであった。

5. 道路、橋梁、用悪水路の整備

これまで仕法中に建設された住宅を中心にみてきたが、尊徳は、道
路、橋梁、用悪水路の整備も具体的に行っている。これらの整備に際
して、尊徳が人足の確保を法的に規定していたことは既に表1でみ
た。整備の具体的な内容を知ることのできる史料として桜町領に關して
まとめられたものは、11点あるが、すべて「人足取調帳」もしくは
「人足帳」という名称が付されている。この事実からだけでも、社会
基盤の整備において尊徳がいかに人足の確保に重点をおいていたかが
判るが、天保12(1841)年から嘉永3(1850)年の10年間に行わ
れた30の工事において費やした総人足数は、3417人に上る。さらに、
これらの史料からは天保12年から嘉永3年の間に整備された道路の
位置、全長、幅員、高さ、橋梁の長さ、幅員、用悪水路の位置、全長、
幅員、深さも判る。その内容をまとめたのが表4から表9である。

道路の整備は、東沼村、横田村、物井村、鹿村において行われている。
その全長は、詳細に判るもののみでも1736間1尺に及んでいる。

まず尊徳は、天保12年に物井村の「杉山御林下」から「横堀村出
口橋際」までの全長529間にも及ぶ道路の大改修を行っている(表4)。
その理由は、

道筋所々水溜り有之、往來之旅人を初、農業人、或は草刈人馬等、
雨天の節は左右に相廻り、難澁仕候に付(後略)⁴¹⁾

とある。また弘化4(1847)年には、東沼村内の道路改修が176
間にわたって行われているが(表7)、その理由は、

(前略)是迄逆數度築立申候へ共、地窪濕地に付何分保兼、肥灰
持運、刈取扱纏ひ、出入往返致難澁候段奉數願候處、(後略)⁴²⁾
とあり、両者とも基本的には農業生産上の支障を取り除くために行わ
れている。

また、用悪水路の整備は、物井村、横田村、東沼村の桜町領内のす
べての村落において行われており、その全長は2847間にも及ぶ。用
悪水路の整備の理由を弘化4年に東沼村において行われた「新悪水堀
普請」にみることができる。

右は當村字谷中前耕地、田畑濕地、乾地、薄地龜田、難場殘之
分、御仕法以來幾度も起返し、作付仕候得共、何分冷水湧出實法
兼、荒地と罷成居候處、(後略)⁴³⁾

すなわち、ここでも道路の整備と同様に、農業生産を向上させるた

めの普請が行われている。

以上の事実は、尊徳の重視した社会基盤の整備が、農業生産の向上に主眼をおいたものであったことを示している。

その一方で、「桑野川村物井村内野同村御新田境堀並鹿村道橋普請人足取調帳」は様相を異にする事実を示している⁴⁴⁾。同史料には、物井村とその隣村である桑野川村との境界を確定するために326間2尺に及ぶ堀割を設けたことが記されている。この堀割が築かれたのは、「やゝもすれば争論止事なく、一同致難蒞」しており、「向後違論無之

様」にするためであった⁴⁵⁾。また桜町領内の村落、桑野川村からの人足数を比較すると、桜町領内の村落からの人足が圧倒的に多い。こうした事実は、自らの仕法地における利害を前提に堀割の設置が行われていたことを示している。

6. 結論

以上みてきたように、二宮尊徳は農村復興を達成する条件に住宅および社会基盤の整備を含めていた。換言すると、尊徳にとっての理想

表7 東沼村における社会基盤の整備

内容	施工年月	起点	終点	長さ	幅	深さ・高さ	人足数
新悪水堀普請 「東沼村谷中前掛地新悪水堀 御普請人足取調帳」	弘化4年 9月	和田川水堀	西沼村作馬道	98間3尺	1間	平均約2尺	東沼村築組人足 63人
		西沼村作馬道	水上堀留	118間	1間	平均2尺	同村和田組人足 18人
		宇草林林野水上	南縁西ノ拾度平	216間3尺	52間	平均3尺	物井村人足 38人
		和田川水堀	新悪水堀ノ拾度	18間半	1間	平均3尺	破畑組人足 51人5分
		新悪水堀ノ拾度	宇馬場砂院除地西縁三番打留	78間半	1間	平均3尺	横田村仲右衛門 1人
		宇馬場砂院除地西縁三番打留	三番打留道敷	79間2尺	1間	平均3尺	青木村人足 1人
		三番打留	四番打留	31間3尺	1間	平均3尺	奥州相馬 所名印之助
		四番打留	五番打留	61間	1間	平均3尺	御手人 12人
		五番打留	六番打留	169間2尺			総計 198人5分
		六番打留	七番打留				
道路および橋梁普請 「東沼村作馬道築立御普請人 足取調帳」	弘化4年 9月	西沼村	東沼村作馬道	9間1尺	2間	平均2尺	東沼村築組人足 17人
		東沼村境川東縁	和田川水堀	68間3尺	2間	平均3尺	同村和田組人足 12人
		和田川水堀打留	三番打留谷中道近分迄悪水堀打越し	31間3尺	7尺	平均2尺5寸	西沼村人足 67人
		三番打留	四番打留	31間3尺	7尺	平均1尺	破畑組人足 23人
		四番打留	五番打留	31間3尺	7尺	平均1尺	横田村仲右衛門 2人
		五番打留	六番打留	116間1尺	1間	平均1尺5寸	物井村茂太郎 1人
		六番打留	七番打留	36間3尺	1間	平均1尺5寸	青木村人足 1人
		七番打留	八番打留	16間	1間	平均1尺5寸	御手人 5分
		八番打留	九番打留	10間	1間	平均1尺5寸	総計 56人5分
		九番打留	十番打留	29間3尺			
橋梁		上橋（ミケ所）		1間	1尺		

表8 物井村における社会基盤の整備（弘化4年）

内容	施工年月	起点	終点	長さ	幅	深さ・高さ	人足数
大谷柳窪用悪水新堀普請 「物井村大谷耕作新用悪水堀 並道橋普請人足取調帳」	弘化4年 7月～8月	宇野合古田境原道上	水下辰拾六度平	135間3尺	4尺	平均2尺5寸	物井村人足 109人
		水下辰拾六度平打留	久下田横堀道高田大嶋往還打越し新 田荒地中	69間	4尺	平均1尺5寸	東沼村人足 33人
		久下田	横堀道高田大嶋往還下	204間半	4尺	2尺	横田村人足 20人
		横堀道高田大嶋往還下打留	貳番打留高田原道	81間	4尺	2尺	破畑組人足 124人
		貳番打留高田原道	三番打留	89間3尺	4尺	2尺5寸	青木村人足 110人5分
		三番打留	四番打留	25間3尺	4尺	平均2尺	御手人 13人5分
		四番打留	五番打留	39間4尺	4尺	平均2尺	総計 410人
		五番打留	六番打留	69間3尺	4尺	平均2尺	
		六番打留	七番打留	82間3尺	4尺	平均2尺	
		七番打留	八番打留	202間	4尺	平均2尺	
桜町通柳窪用水堀切廣け普請 「物井村大谷耕作新用悪水堀 並道橋普請人足取調帳」	弘化4年 7月～8月	大谷耕地北縁悪水堀堀村作業場並水堀	水上子貳拾五度	589間4尺			
		水上子貳拾五度打留	貳番打留	80間	4尺	平均2尺5寸	
		貳番打留	三番打留	111間2尺	4尺	平均3尺	
		三番打留	四番打留	63間3尺	4尺	平均3尺	
		四番打留	五番打留	26間1尺	4尺	平均3尺5寸	
		五番打留	六番打留	15間	4尺	平均3尺5寸	
		六番打留	高田原道	13間4尺	4尺	平均3尺5寸	
		高田原道打留	八番打留	107間	4尺	平均3尺	
		八番打留	九番打留	7間	4尺	平均3尺	
		九番打留	十番打留	20間5尺	4尺	平均3尺	
道路および橋梁普請 「物井村大谷耕作新用悪水堀 並道橋普請人足取調帳」	弘化4年 7月～8月	宇野合古田	久下田大嶋往還道北縁り卯拾九度	117間3尺	4尺	平均3尺	
		卯柳窪古田	宇柳窪新悪水堀久下田大嶋往還道北 縁り卯拾九度	672間			
		久下田大嶋往還道北縁り卯拾九度打留大橋角	貳番打留	37間1尺	2尺	平均1尺5寸	
		貳番打留	六拾八間之間左右付有之候に付相 繼	1727間2尺			
		下物井村、原道宇野合古田境（経由）	新悪水堀際辰拾六度平	38間	4尺	平均2尺5寸	
		横堀村出口穴橋際	南縁卯四度	166間	4尺	平均2尺5寸	
		南縁卯四度打留	寅貳拾九度	120間	4尺	平均2尺5寸	
		久下田大嶋往還道分	高田ノ方寅廿九度	324間			
		高田ノ方寅廿九度打留	高田ノ方寅廿九度	75間	2間	1尺5寸	
		大谷耕地西ノ悪水落橋打留	大谷耕地西ノ悪水落橋	3間	1間3尺	平均1尺5寸	
鹿村野道字大谷谷並木敷 同村之方成ノ三度打留 久下田大嶋往還字柳窪新悪水堀際 高用水大橋 久下田大嶋往還柳窪古田 用水堀卯拾九度打留 貳番打留	弘化4年 7月	大谷耕地西ノ悪水落橋打留	東ノ悪水落口	32間4尺	1間3尺	平均1尺5寸	
		東ノ悪水落口打留	並木敷地	25間3尺	1間3尺	2尺	
		並木敷地打留、並木敷地拾壹間除大（経由）	堀堀	34間	2間	3尺	
		鹿村野道字大谷谷並木敷	同村之方成ノ三度	164間3尺	2間	平均1尺	
		同村之方成ノ三度打留	貳番打留	110間	2間	平均1尺	
		久下田大嶋往還字柳窪新悪水堀際高用水大橋	卯九度	487間4尺			
		久下田大嶋往還柳窪古田	用水堀卯拾九度	8間	3間	平均1尺5寸	
		用水堀卯拾九度打留	貳番打留	39間3尺	3間	平均3尺	
		貳番打留	六拾八間打除三番打留	47間3尺	2間		
		六拾八間打除三番打留	三番打留	37間1尺	2間		
橋梁		上橋		38間	2間		
		上橋		166間	2間		
		上橋		120間	2間		
		上橋		324間			
		上橋		971間2尺			
		上橋		4尺	5尺		

表9 桑野川村と物井村の境堀普請および鹿村道路普請

内容	施工年月	起点	終点	長さ	幅	深さ・高さ	人足数
御新田並内野境堀普請 「桑野川村芝野物井村内野同 村御新田境堀並鹿村道普請人 足取調帳」	弘化4年 7月	高田山道並木敷	御新田境堀内縁水下登番打留	140間4尺	2間	平均2尺5寸	物井村人足 98人
		御新田境堀内縁水下登番打留	貳番打留	76間3尺	2間	平均2尺5寸	横田村人足 3人
		貳番打留	三番打留	24間4尺	2間	平均2尺5寸	鹿村人足 74人5分
		三番打留	四番打留	60間	1間	平均4尺	桑野川村人足 16人
		四番打留	五番打留	28間3尺	1間	平均5尺	破畑組人足 40人
		五番打留	六番打留	326間2尺			青木村人足 23人
		六番打留	七番打留	4間	2間半	平均2尺	御手人 6人
		七番打留	八番打留	27間1尺	2間半	平均2尺	総計 260人5分
		八番打留	九番打留	7間3尺	1間半	平均2尺	
		九番打留	十番打留	5間3尺	1間半	平均2尺	
鹿村道路普請 「桑野川村芝野物井村内野同 村御新田境堀並鹿村道普請人 足取調帳」	弘化4年 7月	鹿村、高田道行露鹿村出口（経由）	登番打留	4間	2間半	平均2尺	
		登番打留	貳番打留	27間1尺	2間半	平均2尺	
		貳番打留	三番打留	7間3尺	1間半	平均2尺	
		三番打留	四番打留	5間3尺	1間半	平均2尺	
		四番打留	五番打留	4間1尺	1間半	平均2尺	
		五番打留	六番打留	21間3尺	1間半	平均2尺	
		六番打留	七番打留	21間3尺	1間半	平均2尺	
		七番打留	八番打留	59間5尺			
		八番打留	九番打留	3尺	5尺		
		九番打留	十番打留	1間	1間		

的な農村は社会基盤が整備された村落であった。ここに明治期の模範村との共通性を見て取ることができる。模範村にとっての社会基盤には、病院や学校などの近代的な施設も含まれており⁴⁶⁾、尊徳にみる社会基盤はその様相を異にする。しかし、すでに幕末において住宅および社会基盤を含め総合的に村落を改変しようとする思想が尊徳によって萌芽していたことは、注目すべき事実である。

尊徳が農村において社会基盤の整備を行う場合、農業生産の増強に主眼があった。そのために農民数の増加が図られるとともに、住宅の整備がなされた。住宅そのものに対する規模および主屋、灰小屋、木小屋による3棟構成は周辺の農村と同じであったが、住宅の建設に際し、畳の禁止、質素に建設することなどの統制を加えるとともに、様々な理由によって住宅を提供することで村民の生活を改変しようとする発想は、尊徳の独自性を有するものであるといえる。また灰小屋を数多く建設していることは、生産性につながる建築物の奨励を行っていたことを示している。また、住宅の大風雨による倒壊や火災による焼失に対する対処は、尊徳に危機管理の発想があったことを示唆している。

これらのことから、尊徳にとっての社会基盤の整備と、その中でも特に住宅は、生産力向上による農民の生活改善につながる生産基地であったといえる。

註）

- 宮地正人「地方改良運動の論理と展開（二）―日露戦後の農村政策―」『史学雑誌』79編9号、1970年9月、同『日露戦後政治史の研究』東京大学出版会、1973年、および江守五夫「地方改良運動における村落共同体の再編成―明治期模範村の実態調査を通して―」高橋幸八郎編『日本近代化の研究 上―明治編―』東京大学出版会、1972年、参照。
- 中村雄二郎「日本の近代と村落共同体」中村雄二郎・木村礎編『村落・地主制―日本近代の基底―』東洋経済新報社、昭和51年、pp.3～20
- 拙稿「明治後期の内務省指定模範村における役場建築の理念」『日本建築学会計画系論文集』第538号、2000年12月、pp.203～209
- 渡辺俊一「都市計画」の誕生―国際比較からみた日本近代都市計画―柏書房、1993年、pp.48～50、明治初期に遠州地方を中心に報徳社運動が展開していく。明治初期の報徳社運動については、江守五夫「明治期の報徳社運動の史的社会的背景（一）」「法律論叢」40巻1号、1966年10月、pp.83～124、同「明治期の報徳社運動の史的社会的背景（二）」「法律論叢」40巻2・3号、1966年11月、pp.47～81、なお、大日本報徳社の敷地に現存する建造物群に関して、平成6年に調査が行われている（大日本報徳社建造物群調査委員会編集『一地域の近代化の歩みを示す建造物群―大日本報徳社建造物群調査報告書』掛川市教育委員会、平成7年）。
- 留岡幸助「都市農村發達の調和」『斯民』15編4号、大正9年4月、p.20
- 留岡幸助は、報徳会の機関誌である『斯民』において「（前略）二宮翁の教は模範村を造り上げるに必要な獨立自治の精神を涵養するにも、道徳と經濟とを調和するに於ても、分度法を以て驕者を制御して往く上に於ても、將又教育上の魂を入れて行く上に於ても、實に適切緊要なるものである。故に私は今日の農村を改良して國家の基礎を鞏固するには實に二宮翁の教が宜からふと思ふのである」と述べている（留岡幸助「報徳主義と農村改良」『斯民』2編5号、明治40年8月、p.28）。
- 不破和彦「日露戦後における農村振興と農民教化（1）―福島県南会津郡伊北村の地方改良運動―」『東北大学教育学部研究年報』No.25、1977年3月、p.128
- 「建築観」という用語は、本来、非常に限定的に用いるべきものであると考える。しかし、本研究においては、建築について特に記述した文献ではなく、農書という農業技術を中心に記述した文献を史料として用いている性格上、「建築観」という用語を、建築の社会的な意味なども含めた広範な意味で用いている。
- 地方改良運動に影響を与えた幕末の農村指導者としては、他に大原幽学などがある。幽学は、下総国香取郡長部村においてモデル農村の建設を試みた人物であり、実際に住宅の設計も手がけている（拙稿「大原幽学の建築観および村落観―農書にみる建築思潮に関する研究 3―」『2000年度日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ』日本建築学会関東支部、2001年、pp.473～476）。
- 上杉允彦「報徳仕法の成立―模範仕法を中心として―」栃木県史編さん専門委員会編『栃木県史研究』14号、1977年、p.86
- 吉田の研究は、考察の対象を住宅の建設に限定している点で、本稿の視座とは異なる（吉田純一「報徳仕法における家屋普請について―日光神領内の森村を例にして―」『福井工業大学研究紀要』第17号、1987年、pp.141～153および同「報徳仕法における家屋普請について（その2）」『福井工業大学研究紀要』第18号、1988年、pp.173～187）。なお、日光神領内の森村および千本木村において行われた住宅の建設については、今市市史編さん委員会『いまいち市史 通史編・別編Ⅰ』今市市役所、昭和55年、pp.244～280でも触れられている。また二宮尊徳の思想や人物像に関しては、明治期以降現在に至るまで多くの人物によって様々な視点から論じられている。二宮尊徳に関する研究史は、以下の論考に詳しい。大藤修「戦後歴史学における尊徳研究の動向」二宮尊徳生誕二百年記念事業会報徳実行委員会編『尊徳開頭―二宮尊徳生誕二百年記念論文集』有隣堂、昭和62年、pp.202～229
- 佐々井信太郎『二宮尊徳傳』日本評論社、昭和10年、p.78
- 桜町領は、小田原藩主大久保家の分家である宇津家の知行所である。なお、桜町領以外の仕法地としては、烏山藩、小田原藩、日光神領などが挙げられ、地域的には現在の

- 福島県から滋賀県までと広範に及んでいる（前掲今市市史編さん委員会『いまいち市史 通史編・別編Ⅰ』、pp.78～87）。
- 『二宮尊徳全集』全36巻、二宮尊徳偉業宣揚会、1928～1932年（1977年に竜溪書舎から復刻）
 - 奈良本辰也「二宮尊徳の人と思想」奈良本辰也他校注『日本思想大系52 二宮尊徳 大原幽学』岩波書店、1973年、p.424
 - 『二宮尊徳全集 第卅五巻』二宮尊徳偉業宣揚会、昭和6年、p.445
 - 「三才報徳金毛録」前掲奈良本辰也他校注『日本思想大系52 二宮尊徳 大原幽学』、pp.35～36
 - 同上
 - 同上、pp.36～37
 - 福住正兄筆記『二宮翁夜話』前掲奈良本辰也他校注『日本思想大系52 二宮尊徳 大原幽学』、pp.124～125
 - 同上、p.125
 - 長谷川伸三「近世農村構造の史的分析」柏書房、1981年参照。
 - 秋本典夫『北関東下野における封建権力と民衆』山川出版社、1981年、pp.227～261、須永昭「寛政期における幕府代官の地方支配の展開」『栃木県史研究』16・17合併号、1979年
 - 小室昭「笠間藩の化政政策」『茨城県史研究』7号、1967年
 - 「御知行所被仰渡書留」二宮尊徳全集 第十巻』二宮尊徳偉業宣揚会、昭和3年、pp.792～793
 - 「荒地開發窮民撫育難村舊復之趣法土臺帳」前掲『二宮尊徳全集 第十巻』、p.807
 - 同上、pp.807～808
 - 『二宮尊徳全集 第三巻』二宮尊徳偉業宣揚会、昭和2年、p.28
 - 佐々井信太郎『二宮尊徳研究』岩波書店、昭和2年、p.404
 - 同上、pp.416～431
 - 「宇津鎮之助殿御知行所村々 荒地起返村柄取直仕法御褒美被下申渡書拔帳上」『二宮尊徳全集 第十二巻』二宮尊徳偉業宣揚会、pp.1023～1075
 - 前掲『二宮尊徳全集 第十巻』、p.1034
 - 同上
 - すべて前掲『二宮尊徳全集 第十二巻』、pp.1217～1234所収。なお尊徳は、神社仏閣の建設、修築も行っている。
 - 前掲『二宮尊徳全集 第三巻』
 - 新築と建て替えを同時に行っている村民が三人いる。
 - 表3のリスト番号105、圓蔵の住宅は現存している。同住宅の詳細は、栃木県教育委員会事務局文化課編集『栃木県の民家―民家緊急調査報告書―』栃木県教育委員会、昭和57年、p.55、pp.135～136に掲載されている。
 - 前掲『二宮尊徳全集 第十二巻』、p.1220
 - 天保11（1840）年から安政2（1855）年にかけて行われた駿河国駿東郡藤村の仕法において、御趣法世話人中に交付した「暮方取直日掛繩索手段帳」には、「多分今日の暮方=差祭り、空数年月を費し、手足を束ね十万=方、致難渋居候儀=付、極難貧者自力=及兼候家・小屋=家根替普請、其外大食・種穀・農具・肥代・或=水難・火難・病難等不慮=天災、康立候入用有=候節=、無利五ヶ年賦、七ヶ年賦、十ヶ年賦、又=極難=及て暮方立り候迄無利置据金貸付、困窮難難之憂ひ=老人も無様取計遣し、（後略）」とある。この「暮方取直日掛繩索手段帳」が交付されたのは桜町領の仕法も行われている天保11年4月であるが、この文言からも尊徳が難村の立て直しにとって住宅の存在を重要視していたことは明らかである（「暮方取直日掛繩索手段帳」大藤修校注『日本農書全集 63』農山漁村文化協会、1995年、p.261）。
 - 津田良樹・平井聖「日光社参史料からみた江戸時代の民家の主屋規模と平面形式」『日本建築学会計画系論文報告集』No.413、1990.7、pp.173～186、津田良樹「街道の民家史研究 日光社参史料からみた住居と集落」扶桑書房出版、1995年、参照。
 - 「道普請人足取調帳」前掲『二宮尊徳全集 第十二巻』、p.1251
 - 「東沼村作場道築立御普請人足取調帳」前掲『二宮尊徳全集 第十二巻』、p.1273
 - 「東沼村谷中前耕地新忍水堀御普請人足取調帳」前掲『二宮尊徳全集 第十二巻』p.1270
 - 「桑野川村物井村内野村御新田境堀並鹿村道橋普請人足取調帳」前掲『二宮尊徳全集 第十二巻』、pp.1255～1259
 - 同上、p.1259
 - 前稿（註3 参照）では役場建築に議論を絞ったが、尊徳の建築観とを比較する視点からは、様々な公共施設に関するさらなる議論が必要であると考ええる。すなわち、社会基盤整備が模範村の要件のひとつになっていたことは前稿で触れたが、今後は、報徳社や報徳会の運用面についても検討し、尊徳による社会基盤整備と比較する必要がある。また、報徳主義を思想的基盤とする地方改良運動が、内務省地方局有志編『田園都市』に影響を与えたことも看過できない（前掲渡辺俊一「都市計画」の誕生―国際比較からみた日本近代都市計画―）。すなわち、『田園都市』に記述されている日本の既存の田園都市モデルのいくつかは、明治期指定模範村であった。換言すれば、内務省は「既存の地方小都市や農村を前提に論を展開している。これらの地域を整備し、協同的生活を推し進め、さらに都市施設を持ち込むことで農村の再生・自立を図ろうとしたのであり（村上晚信「明治期の内務省地方局におけるハワード”Garden City”論の受容に関する研究」『農村計画学会誌』18号（別冊）、1999年11月、pp.13～18）、そこに模範村の理念との重複がみられる。さらに、報徳会の機関誌『斯民』においても田園都市に関して数多くの議論が行われている。
 - 確かに、幕府による「福祉を家と地域社会に担わせる基本方針は近代天皇制国家にも引き継がれ、日露戦争後、軍事大国化を支える社会基盤の創出を目的に地方改良運動が推し進められたとき、国民に勤儉自助努力と相互扶助を強要するイデオロギーとして報徳主義が鼓吹されたのであるが、尊徳自身は国家が福祉機能を果たすべきことも最も強調していた」と大藤修が指摘しているように（大藤修「近世の村と生活文化―村落から生まれた知恵と報徳仕法―」吉川弘文館、2001年、p.210）、尊徳自身の思想と地方改良運動下において鼓吹された報徳主義は立脚点が異なる。そこで、尊徳の社会基盤整備に対する理念が近代以降のように継承、もしくは変容したかについて上述の視点から検討する必要があると考え、一方では尊徳の桜町領以外の仕法地における社会基盤の整備について、他方では田園都市および模範村における社会基盤整備の全体像、報徳会・報徳社の運用面について、建築史的視点から今後論じる予定である。

（2001年2月10日原稿確定、2001年7月10日採用決定）